

# 徳島ペンクラブ通信

発行

徳島ペンクラブ

徳島市東沖洲2丁目1-13

徳島県教育印刷(株)内

TEL 088-664-6776

172号  
平成27.9.1

## 第16回

## とくしま随筆大賞

### 櫻川ふみさん 2度目の栄冠

#### 準大賞 正木孝枝さん



櫻川ふみさん

今年のとく  
しま随筆大賞  
に櫻川ふみさ  
ん。徳島ペ  
ンクラブ主催

の思い出を、母の趣味だった市松人形と短歌を通して語り、母親への思いがにじみ出る好エッセーであると評された。また、3人の選者そろって、挿入されている母親の短歌が効果的と絶賛している。

#### 奨励賞に佐藤智美さん 城東高2年

の第16回とくしま随筆大賞の最終審査会は、7月9日、県立文学書道館であり、大賞に櫻川ふみさん(67) 本名・鈴木綾子、上勝町正木 Ⅱ の「生涯青春」を選んだ。櫻川さんは、2003年、鈴木綾子の本名で『希望』という名の贈りもの」で受賞しており、大賞は今回が2回目。「生涯青春」は、審査員から亡き母

準大賞は正木孝枝さん(徳島市上八万町)の『「京都食べ歩き隊」は行く』。佳作には、栗谷健さん(藍住町)の「物を言う茶碗」、星野凜さん(徳島市南前川町)の「洋上を思う」、雫俊一さん(同市南佐古)の「我が家の鳥たち」の3編が入った。さらに、今回は20歳代以下の方からの応募も数点あり、若い方々の活躍を期待して、奨励賞を設けた。

「第16回とくしま随筆大賞」を受賞させていただきありがとうございます。母の一周忌を前に「生涯青春」をモットーに生き抜

に喜んでいるかと思うと、ただただ感謝と感激でいっぱいです。胃腸の末期で死を見つめながらも、母には短歌を詠

### 受賞の言葉

いた母の人生を書き残したいと、やむにやまれぬ心境で応募

も喜びと生きがいがありました。母も徳島ペンクラブ会員と

させていただきました。思いがけない大賞をいただき徳島新聞にも大きく掲載してくださり、母がどんな

して、長年にわたりお世話になりました。心からお礼申しあげます。(鈴木 綾子)

奨励賞には佐藤智美さん(16) 城東高2年、徳島市中徳島町の「読まれるということ」が選ばれた。

45編の応募があり、6月、全作品をペンクラブの副会長、理事(鈴木副会長は作品応募のため辞退)ら5人が、作者名を伏せて予備審査し、優秀作品13編を選出した。この13作品を、審

査員の依岡隆児・徳島大学総合科学部教授、撫養佳孝徳島新聞生活文化部次長、竹内菊世・徳島ペンクラブ会長の3人が、それぞれ個別に審査し、7月9日、3人の合議で最終決定した。

佳作、奨励賞以上の受賞者の表彰式は会員の懇親会を兼ねて、10月4日(日)午前10時半から、徳島駅前阿波観光ホテルで行う。当日は、随筆大賞選考の経過報告の後表彰を行い、続いて審査員代表の講評、受賞者代表あいさつ、大賞、準大賞作品の朗読、その後懇親会に移る。ペンクラブ会員の会費は3000円。

大賞、準大賞の作品は、12月下旬刊行予定の「徳島ペンクラブ選集」33号に、選考経過、3審査員の選評とともに掲載する。

## 富永館長 文書館を講師に研修会

ペンクラブ賞 木村喜美子さんに

阿波観光ホテル

今年のペンクラブ賞の発表・表彰を兼ねた研修会は、諸般の事情で、「選集」32号発行から半年余遅れの7月12日、講師に富永正志・県立文学書道館館長を招いて阿波観光ホテルで開いた。

38人が出席。竹内会長のあいさつの後、事務局からまずペンクラブ賞の発表があり、ベテラン会員で、元副会長の木村喜美子さんの



ペンクラブ賞受賞の木村喜美子さん⑧

「赤い帽子」に決まったことが報告された。次点は、六田靖子さん「孫の力」、熊谷和代さん「われは海の子」、鈴木綾子さん「余四郎」、正木孝枝さん「落葉松」の4編だった。以上の作品は、徳島市民文芸集「まゆやま」に転載される。

続いて表彰が行われ、ペンクラブ賞受賞の木村さんに、竹内会長



講評する竹内紘子さん

いつも年末に送られてくる選集を読みながら、考えさせられたり、楽しんだり、思いをいろいろ広げています。今回選ばれた作品について感想を申し上げます。

父の死への辛い思いを描いた六田さんの「孫の力」は、病気で老齢の親をかかえる機会はどうなたにもあるだけに、身につまされ、ひきこまれる話でした。一方、同じ父への思いを書いた正木さんの「落葉松」は、父との関係を未来につなげるもので爽やかな読後感が残りました。

随筆といえ、身近で見聞きしたことから広がりはじまりますが、その広げ

講評 竹内 紘子

海を眺めてこんな発想をする作者の

方驚いたのは熊谷さんの「われは柔らかな感性に興味を引かれました。また、私たちの読む行為には「知る」喜びもあります。鈴木さんの「余四郎」にはそれがあり、字幕翻訳者を知ること映画を見る目も変わる気がしました。

最後に今回の受賞作「赤い帽子」にはまさに脱帽でした。ユ一モアにあふれた文体は、ご自身が楽しみながら書いている様子が伝わってきて読みながらうれしくなりました。

ペンクラブ会員の皆さまのご健筆を祈り、今年度も楽しい作品を読ませていただきたいと思います。

から賞状とお祝いの「生花のアレンジ」が贈られた。また、次点の3人(熊谷さんは欠席)は舞台上上がり、それぞれ謝意を述べた。木村さんは、間もなく92歳になるが、「私の青春は戦争と共にあった。賞を励みに、この大事な思い出・体験を書き残したい」とさ

# 戦後70年

## 戦争に描かれた文学

らなる創作意欲を語っている。  
この後、竹内紘子理事が次点以上の作品を中心に別項の通り講評した。

最後に、富永正志館長の「戦後70年 文学に描かれた戦争」と題した講演（要旨別項）を聴いた。午後は、会食をともにしながら、「選集」32号や秋の県民文化祭参加イベントなどで意見交換した。



### 富永館長の講演要旨



「文学に描かれた戦争」について講演の富永正志氏

今年は戦後70年という節目の年に当たりますので、文学書道館では「戦後70年 文学に描かれた戦争」に描かれた戦争—徳島ゆかりの作品

を中心に」と題する特別展を8月7日から9月23日まで開催することにしました。きょうは、この文学展で紹介する徳島ゆかりの作家の作品の中でも、徳島大空襲を最もリアルに描いた森内俊雄さんの「眉山」という作品を中心に、特別展についてお話しさせていただきます。

1945年7月4日未明の徳島大空襲では、約千人が亡くなり、2千人が重軽傷を負い、7万人が被災したといわれています。特別展のチラシの写真の下の方に、森内さんの「眉山」の一節を赤い文字で印刷しました。「あのときからすでに27年がたつ

に、私はいまだに母に手を引かれて火の中を走っている夢をみる」という文章です。

徳島大空襲の恐怖がどれほどのものだったかを、よく物語る象徴的な文章として取り上げました。この文章はこう続いています。

「夢は屢々(しばしば)、現実の追憶より鮮やかなものであるが、私の場合、どんな形で鮮明であるかといえば、たとえばつながれている母の荒れた手の、確かな感触であつたりする。それはまた妻の手にひどく似ていて、夢で私は時々妻に手を引かれて逃げている」。

森内さんは夢と現実のあわいを表現するのが巧みな作家ですが、これも非常にリアリティーのある素晴らしい文章だと思います。

森内さんは1945年3月、8歳の時に大阪の空襲で家を焼かれ、両親の故郷である徳島に疎開してきました。父親は板野郡藍住町勝瑞、母親は徳島市の出身です。疎開してきて、7月4日にまた徳島大空襲に遭い、火の海の中を母親と兄と3人、当時暮らしていた徳島駅前の伯母の家から内町小学校の校庭に逃げ込み、さらに新町橋を渡って眉山に逃げ込んで九死に一生を得るといふ体験をしています。

「眉山」には、そのときの体験が生々しくつづられています。主人公は30代半ばの「私」という、森内さんと等身大の人物です。その「私」が病気で入院するんですが、退院してもなかなか体調が戻らない。そこで徳島市出身の妻の提案に応じて徳島に帰り、子ども



和やかに歓談する研修会後の懇親会

の頃の徳島大空襲を回想するという構成になっています。

子供の頃、火に追われて眉山の中腹に逃げ込んだとき、そこには布団をかぶった若い女性が一人うずくまっていました。その女性は森内さん親子に布団を差し出すと、自分は燃え盛る火の海に溺れていきます。なぜそうしたのか、理由はわかりませんが、差し出された布団の裏は血に染まっています、その女性がけがをしていたことだけは確かです。そして、翌年の1月、大阪に引き揚げたときにもその布団を持ち帰り、「大阪の冬の寒い夜に、私たち兄弟を暖かく包んでくれるものとなった」と書かれています。

主人公は大人になっても、その女性のことが脳裏を離れず、自転車で徳島市内を回って女性の幻影を探し求めます。「眉山」は、そういう悲しくも美しい小説です。そして、徳島大空襲の体験を正面から描いた小説は、私の知る限り、この「眉山」だけだろうと思います。

「眉山」は今から42年前の1973年、森内さんが37歳のときに発表された小説で、5度目の芥川賞候補になった作品です。受賞はできませんでしたが、選考委員の吉行淳之介が芥川賞に推薦しています。これは東京の文芸記者から聞いた話ですが、その記者が吉行さんに「芥川賞は取りこぼしが多いといわれていますが、あげ損なつた人はいますか」と聞くと、「森内俊雄ぐらいかなあ」と言ったそうです。森内さんの評価がよく分かるエピソードではないかと思えます。

森内さんの小説の魅力の一つは、詩的で静謐な文章にあります。「眉山」にも、こんな文章が出てきます。「阿波踊りの稽古が、城山公園や、町のビルの屋上ではじまっている。女踊りの、招くような手のそよぎが私に見えてきた。その手が死者のまつりを呼んで、お盆がきた」。

空襲の火の手を逃れて内町小学校の校庭に逃げ込んだ場面には、こんな文章が出てきます。「私の耳に人気のないはずの教室から、

オルガンの音が聞こえてくる。燃えさかる火は、誰かが鍵盤をいちどに押さえこんでいるような音だった」。

吉行さんもそうですが、森内さんも若い頃は詩を書いていたので、そういう詩的な表現に長けているのだろうと思います。

もう一つ、森内さんの小説の魅力として、人間とか人生に対する深い認識が随所に散りばめられていることが挙げられます。

たとえば「背中というものは、さびしく恐ろしいものだ。大阪の家の防空壕でうつ伏せになって死んでいた人の、焼け焦げた背中の記憶が重なってもいる」とか、「記憶の中で、ひとは老いることがない」とか、「焼跡では、死んだ人間のほうが安らいでいた。生きているもののほうが、よごれてとげだち、人をおびやかすところがあった」といった文章です。

「この町ではどこにいても眉山が見える」といった文章もそうです。一見、何気ない言葉ですが、山ですからどこから見えても不思議はないのですが、私はこの一節を読んで以来、眉山をそんな意識で眺めるようになりました。森内さんの文章に、そうした力があるということですし、森内さんの心の中にいつも眉山が存在するからこそ生まれた表現だろうと思います。

森内さんが徳島大空襲の体験を書いたのは「眉山」だけではありません。文学界新人賞を受賞したデビュー作「幼き者は驢馬に乗って」や、鳴門を舞台にした「梨の花咲く町で」、書道を題材にした「真名仮名の記」に入っている「石声の笏」、「桜桃」に収められている「七夕さん」、「短篇歳時記」の中の「秋の雨しづかに午前をはりけり」などにも登場します。

特にデビュー作の「幼き者は驢馬に乗って」では、徳島大空襲を6ページにわたって描いています。デビュー作には、その作家のすべてがあるなどと言われますが、そのこと一つ取ってみても、森内さんにとって、徳島大空襲の体験がいかに重要なものであったかが、お分かりいただけると思います。

この「幼き者は驢馬に乗って」が芥川賞候補になったとき、選考委員の川端康成が選評でこう絶賛しました。「私の最も親敬を感じたのは、森内俊雄氏の『幼き者は…』であった」「これは私のたいへん個人的な好みで、つまり、私の書きそうな手法で、私はこれに及ばぬと思ったからである。私が意識し、努力するところを、この人はもつと自然に行っている。若さのやわらかさでもあろう。私は森内氏の才能に期待する」。

「太宰治論」で知られた文芸評論家の奥野健男も「幼き者は驢馬に乗って」について、こう書いています。「こういう小説をこそ、ぼくは求め、読みたかったのだ。こういう作品があればこそ、ぼくは文学、小説の世界に夢中になったのだという久しぶりの感動を覚えた」。

奥野さんは森内さんの「骨川に行く」という作品が芥川賞を取れなかったことについても、こう書いています。「この作品が芥川賞にならなかつたことで、日本の文壇に絶望を感じた。本心からそう思った。こういう作品を書いたあとは、森内俊雄はどんな遊びの作品を書いてもかまわない。必ず文学史に彼の名は残るであろうから」。

森内さんは知名度こそ、そう高くはありませんが、非常に熱烈なファンを持っている作家で、私も学生時代に「幼き者は驢馬に乗って」を読んで以来、森内さんの小説のファンになりました。

「眉山」に話を戻しますと、この小説でもう一つ注目したいのは、主人公が徳島に帰ってきて、心身ともに健康を取り戻していくという点です。主人公ばかりでなく、徳島と一緒に帰ってきた、間もなく9歳になる主人公の長男も、東京でいたときはぜんそく気味だったのが、次第に症状が改善されてきます。

この小説の最後に「眉山は救いの山」であるという印象的な言葉が出てきますが、森内さんにとっては、眉山ばかりでなく、徳島という土地そのものが救いの地になっていると読むことができます。

同じことが「氷河が来るまでに」という長編小説にも出てきます。この小説は「眉山」から16年後の1989年52歳のときに発表した小説で、読売文学賞と芸術選奨文部大臣賞を受賞した作品ですが、ここでも主人公のボロボロになった肉体と魂を癒やしてくれる場所として徳島が登場します。

森内さんにとって徳島は、「眉山」の中では、スタチに象徴される健康的な夏の少女のようなイメージで捉えられています。「私の古里は大阪より徳島である」と何かに書いていましたが、それは単に両親と奥さんが徳島生まれであるということだけではなく、肉体と魂を癒やしてくれる場所としての徳島ということが強く意識されているのではないかと思います。

ですから、森内さんは「徳島に行く」とか「来る」といった言い方はしていません。「徳島に帰る」と書いています。「眉山」にも、こう書かれています。「妻や子供たちとともに、徳島の町に帰ろう。私は大阪に生まれ、そこで育ったが、いま帰ってみるべきふるさと徳島である」。

森内さんは徳島を非常に大事にしている、徳島大空襲以外にも、徳島のことが小説にたくさん出てきます。たとえば、「真名仮名の記」には相生茶や徳島ゆかりの書家である貫名菘翁、中林梧竹らが出てきます。「桜桃」の中の「不意の客」には、クラシック喫茶「みき」とその主人で亡くなった三木芳彦さんが登場します。それから「短篇歳時記」には大谷焼の森浩さんや学駅が出てきますし、「梨の花咲く町」には鳴門の大谷駅や、舞踊家の桧瑛司さん、作曲家の三木稔さんらが出てきます。

「眉山」は『マラナ・夕終篇』という短編集に収められています。すでに絶版になっていて、手に入りにくくなっています。そこで文学書道館では、特別展の開催に合わせ、ことのは文庫の1冊として出版した「文学に描かれた戦争―徳島大空襲を中心に」という本に「眉山」を収録しました。これで、この作品がようやく多くの

人に読んでいただけるようになりました。

この文庫本には、「眉山」のほか、特別展で紹介する瀬戸内寂聴さんの「多々羅川」（自伝的短編連作集『場所』所収）、富士正晴「帝国軍隊に於ける学習・序」、海野十三「降伏日記」の4編を収録しました。

瀬戸内さんは日本の敗戦当時、北京で暮らしていた、終戦の翌年に日本に引き揚げ、徳島駅にたどり着いたとき、徳島市が一面の焼け野原になっていたのを見て呆然と立ちつくします。さらに、母と祖父が徳島大空襲のとき防空壕で焼死したことを知らされるという体験を持っていて、それを「いずこより」とか「場所」とかの自伝的小説に描いています。

瀬戸内さんが、しきりに反戦や護憲を言ってきたのも、70年前のこの体験が出发点になっています。この間も安倍政権の安保法案に反対する国会議事堂前でのデモに参加して、「戦争にいい戦争はない。戦争はすべて人殺しです」と演説をしていました。背骨の圧迫骨折と胆のうがんの手術の後の寝たきりの状態からようやく立ち直ったばかりで、しかも93歳の高齢ですから、頭の下がる思いがしました。

戦後70年が過ぎ、戦争体験者の高齢化が懸念されていますが、これからは戦争体験を描いた文学作品がもつと注目されてもいいのではないのでしょうか。活字になった作品は永遠に残りますから、悲惨な戦争の記憶の継承という点で、今後ますます重要な役割を担っていくことになるはずです。

文学書道館の戦後70年の特別展も、そんな思いで企画しました。ぜひ、多くの県民に見ていただきたいと思っています。

## 雑感

数年前、関寛齋の故郷千葉県東金市を訪れたことがある。房総半島の中東端で銚子市の南に位置している。後で地図を見てみると九十九里浜はすぐ近くだった。

関寛齋の故郷というので期待して行ったのだが、だだっ広いこれといった特色のない町だった。駅から二キロほど離れた小高い丘の上にある文化会館で開催中の関寛齋資料展を見てきた。

そこで関寛齋研究家の方と話していて印象に残っているのが、「セキオウ」である。すぐさま「関翁」という漢字が脳裏に浮かんだ。敬意をこめていうその言葉を何度も聞いて、さすがは生まれ故郷だけのことはあると得心した。徳島ではそんな呼び方をする人にお目にかかったことがない。徳島でこそもつとそのように呼ばれるべきではないだろうか。

文久三年に縁あって徳島藩の藩医となった。明治元年に戊辰戦争に従軍。翌年徳島に帰り、禄籍を奉還して徳島市内に医院を開業した。以来三十年、開業医として地域医療に貢献した。貧しい人から治療費は取らなかつたといい、無償で種痘を施した人数は数千人とも。黒澤明監督の「赤ひげ」

## “赤ひげ”先生 そのものだった 関 寛 齋

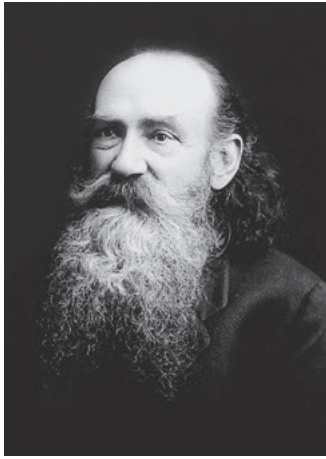
という映画が話題になったことがあるが、まさに赤ひげ先生そのものだった。当時は「関大明神」と慕われたというが、今、「関寛齋」の名を知る徳島の人は少ない。以前、城東高校の東、福島川沿いに関寛齋の石像ができるとき発足したはずの顕彰会は今もあるのだろうか。

関寛齋は明治三十五年、七十二歳という高齢にもかかわらず北海道へ渡った。斗満（現陸別町）という北海道でも最も寒いといわれる土地での開拓を志したのである。

そして現在の陸別町の礎を築いた後、大正元年、自らの命を絶った。八十二歳だった。

陸別町には関神社があつて、御霊が祭られているそうだ。関寛齋資料館や記念碑、遺跡が多数あつて住民の尊崇を集めている。関寛齋診療所という病院もあるらしい。三十年も住んだ徳島に資料館の一つもないのがいささか寂しい。

異郷の地に果てた関寛齋に一人の人物が重なる。ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソウザ・デ・モラエスである。ポルトガル海軍士官、在神戸同国領事を経て、徳島に来住した。今秋、ペンクラブの主催で「モラエス文学の魅力」と題するイベントが開かれる。この機会に改めてモラエスに関心を寄せてほしい。（丁山 俊彦）



晩年のモラエス

# 岡村多希子氏が講演

ポルトガルの大衆歌謡

## ファドや作品の朗読も



モラエス作品の翻訳で知られる岡村多希子さん

徳島ペンクラブの第17回県民文化祭分野別フェスティバル参加イベント（NPO法人モラエス会共催）は、既報の通り、ポルトガルの文豪で、晩年は徳島で生涯を終えたモラエスをその作品面から取り上げ、顕彰する。概要は、「モラエス文学の魅力」をテーマに、ファド（ポルトガルの大衆歌謡）のコンサートをオープニングに、講演とモラエス作品の朗読で構成。講演は、モラエスの数々の著書を翻訳し、ポルトガル文学に詳しい東京外国語大学名誉教授の岡村多希子氏。氏には作品朗読の際、その作品の解説もお願いする。作品朗読は、ポルトガルやモラエスの映像、ギター演奏をバックに3、5作品を取り上げる。ファドは、マツオカテツヤ、

ペンクラブ主催 県民文化祭参加イベント

### 「モラエス文学の魅力」に迫る

#### 「選集」33号の原稿募集中!!

ただ今、「徳島ペンクラブ選集」パート33（12月下旬発行予定）の原稿を募集中です。多くの会員の応募をお待ちしています。特集は、前号でお知らせしたとおり、「モラエスの魅力いま一度」

のテーマで、ポルトガルの文豪で、晩年は徳島市で過ごし、75歳の生涯をこの地で終えたモラエスを取り上げます。モラエスの作品を中心に、いろんな角度からモラエスの魅力に迫り、その功績を顕彰します。

●原稿 2000字または4000字。写真、イラスト等入れる場合はその分、文章を短く。計画段階、あるいは書き始める前に編集担当・田上まで、ご連絡ください。

●一般作品は、従来どおり。随筆は2ページ分、2000字。短歌、俳句等は2ページ分、10首。詩、連句は2ページ分。

●掲載料 一般作品は2ページ7000円、追加1ページ当たり2000円。特集も会員外の方に依頼の場合や特例を除き、一般作品の掲載料に準じます。掲載料は、翌年の1月末に郵貯口座引き落とし、または郵便為替で徴収します。

●原稿の締め切り 一般作品は9月末、特集は10月20日とします。

●原稿の送り先・お問い合わせ

〒770-8074 徳島市八万町下福万128-28 田上倉平宛  
(電) 088-668-3563

E-mail: jonan@mc.pikarane.jp

※原稿のご送付に当たっては、安全のため必ずコピーあるいは控えを保存しておいてください。

11月21日(土)  
県立文学書道館

# 羽ばたけ コウノトリ

96翁 木村 義次

但馬の国から 明石越え  
淡路の空も 一っ飛び  
鳴門の潮を 浴びながら  
飛んで来ました 阿波の国  
ようこそ おいで  
コウノトリ

西に聳える 剣山  
清き流れの 吉野川  
暖か南の 風受けて  
人情こまやか お接待  
元気に羽ばたけ  
コウノトリ

ドイツ第九の  
歌高らかに  
豪華絢爛 阿波おどり  
藍の香りも ふくよかに  
作っておくれ 幸多く  
共に暮らそう  
コウノトリ

近作を編集部に寄せていただきました。ご紹介します。(倉)

## ●● 来月12日高知へ 秋の文学旅行 ●●

ペンクラブ秋の文学旅行は、前号でお知らせしたとおり、10月12日(月、体育の日)、高知市を訪れ、「文学散歩」する。

文学散歩は、高知県立文学館からスタート。まず、昨年12月亡くなった宮尾登美子さんを追悼する特別企画展を見学する。ついで、同館から徒歩で5分の寺田寅彦記念館を訪問。寅彦が4〜9歳の間住んでいた旧家で、彼の随筆には旧家周辺にまつわるものが多く、見応えがありそう。

この後、バスで3分の高知城ホールで昼食。最後は、バスで5分

の高知放送RKCホールへ。ちょうどこの日、宮尾登美子さんをしのお「山本一力さん&檀ふみさん」の対談(高知県立文学館主催)が予定されており、これを拝聴する。

貸し切りバスの徳島駅前出発は、午前7時30分。同駅前帰着は午後7時ごろの予定。参加ご希望の方は、同封の参加申し込みがきに所定の事項を書き込みの上、9月28日までにお申し込みください。年齢は必ずご記入ください。旅行保険と入場料の関係で必要になります。

この件のお問い合わせは、

鈴木綾子さん(090-2787-7614)まで。

### 編集後記

ペンクラブの前編集長で元副会長の上野隆さんが、8月1日の理事・役員会にひょっこりお元気な姿を見せられ、二つの提案をされた。一つは、野口雨情(1882〜1945)の歌碑を徳島市の親水公園(助任川)周辺に建立する計画があるのに関し、ペンクラブへの後援依頼。もう一つは、ペンクラブ創立50周年が2年後に迫っている。記念誌をぜひとも発行してほしい、とのご進言である。歌碑建立の件は、「歌碑を建てる会」(仮称)を代表してのもの。茨木県生まれの雨情は、63年の生涯に、国内はもとより、昔の樺太(サハリン)など、東アジアにも出掛け、各地で2000余の歌(童謡)を残している。もちろん、本県にも何度か来訪、その都度歌を残され、それを記念する歌碑が次々に建てられてきた。が、徳島市内にはない。そのため有志の間で、来年が雨情の来徳80年に当たることあつて、建立の機運が盛り上がってきた。ペンクラブ会員で、雨情の歌碑建立に情熱を燃やし続けていらつしやる、発起人の一人、溝渕匠さんをよく知るだけに、編集つ子も心から建立の実現を期待したい。50周年の記念誌発行に関しては、現会員の義務としても知恵を出し合い、早急に準備を進める必要があるのではないか。(倉)